地球は面白い

イギリス・コヴェントリー

レディ・ゴダイヴァ伝説

中野　香織

チョコレートの季節がやってくると思い出すのは、中部イングランドの町コヴェントリーである。ロンドンから北西の方角に電車で一時間ほどのこの町には馬に乗ったレディ・ゴダイヴァの銅像がある。

時は一〇四〇年、領主リオフリク伯爵の重税に苦しむコヴェントリー住民の姿を見るに見かねた伯爵夫人ゴダイヴァは、夫に税を軽減するよう嘆願する。ところが伯爵の返事ときたら、「おまえが裸で町を歩けば願いをかなえてやろう」という冷たいもの。意を決したゴダイヴァは、長く豊かな髪だけを衣としてまとい、馬に乗って町を歩き出した。彼女の心にうたれた住民はだれ一人として姿をみせなかった。こうして税は晴れて軽減されましたとき。

これがレディ・ゴダイヴァ伝説。美談は世界各地に広まって、多様な分野のクリエーターの心を熱くする。ベルギーのジョセフ・ドレイブスもそのひとり。一九二六年に高級チョコレート会社を創設した彼は、この勇気ある女性の名前を冠したチョコレートで世界的な成功を収めることになる。

さて、古い伝説をもつ町だが、町並みは比較的新しい。軍需産業が集中していたために第二次大戦時にドイツ空軍に破壊されたからだ。大聖堂からして、一九六二年建築のモダンなものだ。

地元のハーバート美術館に入り、レディ・ゴダイヴァを描いた絵を見る。当惑して凍りつく。ゴダイヴァは絶世の美女、と思い込んでいたのだが、どうも事情が違うようなのである。

ひょっとしたら、裸のゴダイヴァを町人が見なかったのは「あえて見る必要を感じなかった」からではないのか。夫が妻に裸で町を歩かせても平気だったのは、あまり妻に魅力を感じていなかったためではないのか（あるいはよほど特別な種類の愛情か）。

実はゴダイヴァ伝説には後世に尾ひれがつく。住民のなかでただひとり、夫人の姿を拝もうと窓からこっそりのぞいた男がいた。仕立て屋のトムである。天罰を受けたトムの目は矢で射ぬかれ、その名は「ピーピング・トム（のぞき屋トム）」としてサイテーな男の代名詞になりましたとさ、というもの。

好奇心を満たしたトム氏は目を射ぬかれて本望だったのか無念だったのか、伝説はそこまでは教えてくれない。しかしゴダイヴァ像は教えてくれる。人々の幻想のなかで千年も「美女」として生き続けるために必要なものは美ぼうではなく、美しき心意気とほんの少しのエロティシズムである、と。（服飾史家）

イラスト・下田　一貴